

日蓮宗生命倫理研究会・第四回
「心」といのちの講座」

(平成十九年十二月四日・宗務院)

「癒す」とは癒されること」

—日蓮大聖人・女性(のお手紙の世界)—

用意資料		
※引用の遺文 お手紙		
No.3	No.2	No.1
王日殿御返事	雁のたより—生の仏 夢か幻か—死の仏	王日殿御返事 (布施と法施)

No.1 『仏は真に尊くして物によらず』

王日殿御返事

(布施と法施)

No.2 『母の乳香は三千大世界の値打ち』

刑部左衛門女房

(孝養心) 軽んじられる生・出産

No.3 『生と死は生の仏、そして死の仏、生死ともに仏である』

上野殿の母尼

お話ししたいと予定している事

はじめに◎テーマ(癒すことと癒されること)……発意の動機

※余話として
千手観音の舞い
青の洞門の實在

最新のメッセージ / 死はかんたん、生きることがむずかしい……と。

- ① 尊厳死より、尊厳生[◎]の大切さをせひ伝えてほしい
- ② 生命のつづき、つぎがりへの感謝 結婚・出産・孫の誕生

—大手術から生還のお医者者の実感—

私の
知人で医者で
ある人の
患者体験

日蓮大聖人のお手紙の世界

…へ究極の癒しはいのちの休息、安心、立恵

「仏は真に尊くして物によらず」

「尊厳生こそ…仏教の教える、生の仏ではなからうか」

- 生まれること、生んでいただけしたこと、生きぬく力、そして死
- 現代—軽んじられる生(へ出産のリアリティ) 今一度、直視する社会へ
- 究極の癒し……は——尊厳生[◎]を努力するお互いの合わせ鏡——
慈悲心と自分をみつばいに生き、真に尊くとは自己の仏性の目ざめである。

王日殿御返事

「仏は真に尊くして物によらず」と

辨房の便宜に三百文、今度二百文給了。佛は真に尊して物によらず。昔の得勝童子は沙の餅を佛に供養し奉て、阿育大王と生れて、一閻浮提の主たりき。貧女の我かしら(頭)をおろし(剃)て油と成せしが、須彌山を吹ぬきし風も此火をけさず。されば此二三の鷲目は日本國を知る人の國を寄せ、七寶の塔を忉利天にくみあげたらんにもすぐるべし。法華經の一字は大地の如し、萬物を出生す。一字は大海の如し、衆流を納む。一字は日月の如し、四天下をてらす。此一字返じて月となる。月變じて佛となる。稻は變じて苗となる。苗は變じて草となる。草變じて米となる。米變じて人となる。人は變じて佛となる。女人變じて妙の一字となる。妙の一字變じて臺上の釋迦佛となるべし。南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。恐々謹言。

王日殿

日蓮花押

話は短い美しい文章だと思う。いい手紙だと思う。

南無妙法蓮華經という金言が、これほど自然に導かれてくる文章も少ないのではないか。いったいに日蓮聖人の書簡にはその多くを通して、これよりほかに何かを語ろうとすれば、南無妙法蓮華經と言わずして何と唱え得ようという必然の真ごころ、その流露がある。

(訳)

弁殿の便のついでに三百文、また今度の二百文、お受けいたしました。仏は真実そのままので尊いのであって、供養などの金品の多少によるものではありません。(阿育王の前生譚によるところの)その昔の得勝童子は、(砂遊びのさなかに)砂で作った餅を仏陀に供養したてまつって(その前世の善業によって)阿育大王と生まれることができ、この閻浮提(須彌山の南方の一大国)つまり人間世界)に主となったでありました。また、貧しい女性が(仏陀に供養する品が何もないというので)自分の頭髪を切りおろして(その代金にあてて)油を求め供養品としたところ、あるとき須彌山を吹きぬけた一陣の風が(他の多くの灯火を消してしまつたのに)この火だけは消さなかつたといひます。そうなりますれば、(貴女からの)この二、三の金銭は、日本國を統治する人が國をあげて七寶の塔を忉利天(須彌山の頂上)に組み上げたものにも勝るものでしょう。法華經の一字は大地のようなものであって、そこから万物が芽生えます。また一字は大海のようなものでもあって、あらゆる流入物をのみこんで納めます。あるいは、一字は太陽や月のようであつて、四方八方の天下を照らします。この一字は變つて仏とも成ります。稻が生まれ變つて苗となること、苗はまた生まれ變つて草となる、草が生まれ變つて米となる、その米は(食べられ)變つて人間となる、その人生まれ變つて仏となる。(……このようにして法華經を信仰する)女性もまた變つて妙の一字となるのです。その妙の一字が生まれ變つて台上の釈迦仏となるのです。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

★私の著『日蓮聖人・女性への手紙』…その中の18通ばかりの主なお手紙のうち、一番好きなものです。短い中に、高い文学的な香気と、宗教性のとけ合った世界。上記は原文からの現代訳です。

日蓮聖人・59歳(身延)

自分のこと、自分では食いたいと思つて、いる女性からのお手紙と供養の……そのお礼にと書かれたご返事です

NVN 第4回「心といのちの講座」2007.12.4.於池上

永田美穂

(資料)No.1

雁のたよりー生の仏

『刑部左衛門尉女房御返事』という手紙の書き出しは、しやれた表現ではじまる。

『今月飛来雁書云ク』と。

雁書。つまり手紙のこと。雁の便とも雁の使いとも言われ、消息をもたらす使いの雁ということ。昔、漢の蘇武が、胡国に捕らえられたとき、雁の足に書を結びつけて音信を故郷へ通じたという故事による。

空とぶ雁であるから飛来と心の言葉はすぐに流れ出て、そしてはるけくも遠くより来つるその女房殿の手紙を開けば、用件はこうであった。(日蓮聖人による確証の文が次)

『この十月三日はお母さんにあたる人の十三年(忌)にあたられますとかで、(供養にと) 銭十貫文を(お届けいたします)』というお便りだったのですね……と。

この挨拶代わりの書き出しにつづいてすぐ、

『外典(仏教以外の、儒教道教等)の三千余りの巻には忠孝の二字を骨格として教え、内典(仏教)五千余りの巻には孝養を主眼としております』

として、内典・外典で述べられているところの、親不幸者がどれほど救いがたいことであるかを、経典から例をあげて説明される。これは女房殿の親孝行をほめ讃える意味もあろう。

そのようにして、親孝行の必要を切々と女房殿に説き、経典の中の言葉を教え伝えている間にも、日蓮の心の中にはすでに自分自身の母への追慕がふつふつと湧いてきた。

『今、日蓮が思いますには、これら経文はまったくもってその通りだと感じます。父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきことではありませんが、母の御恩の事、ことのほか心肝に染みて貴いことと思います。飛ぶ鳥が子を養い育てるさま、地を走る(地上の)獣がその子に(餌が欲しい欲しいといつもキーキーと)せめられている様子など、目も当てられないほど(切ないこと)であるし、魂も消える(ように心の痛む)かと思われるものです』

『それについても母の御恩は忘れがたいものです。胎内に九月の間の苦しみ、腹は鼓を張つたようであり、首は(痛みで)鍼を下げたようなありさま。気は(ハアハアと)出るばかりで、(一瞬も安らかに)入るといふ事もなく顔の色は枯れた草のようになっています。臥すうとして体を横たえれば腹部が(引っ張られて)裂けるようだし、坐れば五体がどうも安定しない。このようにしてお産もすでに近づけば、腰は(痛さのあまり)破れるのか、目は(苦しみとわずきのあまり)とび出て天にも昇るかと思われる。こんななまでの思いをさせられた敵のような者を産み落したならば、(思い知れとばかり、赤ん坊の)腹を切り裂いて捨てても足りないにちがいない。ところが、そうではなくて(たちまち今日までの)自分の苦痛を忍んで急いで抱きあげ、血をなめ(……るばかりの)手当をし(不浄をすすいで清らかにし、胸にひきつけ、かき抱くようにかかえて三カ年の間ねんごろに養う。子がその母の乳を飲むことは一百八十斛三升五合にもなります。この乳の値打ちは一合といえども三千大世界に替られる(相当する)ほどのもの。そうすれば、乳一合の値段を換算してみますれば、米に当てれば一万一千八百五十斛五升、稲にしたら二万一千百束以上にもなり、布ならば三千三百七十反であります。何ということでありましょうか、まったく一百八十斛三升五合の価値とは。

他人の物は銭一文米一合であってさえも、盗むようなことがあれば巢守(＝牢につながらる姿)となってしまうものです。それなのに、親は十人という多くの子を養うということがあっても、子のほうは一人の母を(真ごころをこめて)養うということがありません。あたたかい(肌の)夫を懐いて寝ることはしても、こころえた母親の足をあたたためようという女房はない。』

……、こうして生まれてきた世の人びとであるけれど、日蓮の嘆きそのままにやがて経典にも示されている通りの『父母は常に子を念へども、子は父母を念わず』の不孝者が世に満ちる。そうであってはならない。この孝養心こそは、仏陀釈尊自ら初めて開示された法華経の本願でもある。

『これは日蓮が心中に第一と思う法門であります。父母に御孝養の意のある人びとは(父母に)法華経をお贈りになるべきです。教主釈尊も父母の御孝養に法華経をお贈りになったのです』



(形部左衛門尉女房殿へ)
※弘安三年十月 (1280年)

この手紙のあて名の人物のことについてはっきりしたことがわからない。……が、これこそ、雁書といえは『刑部左衛門尉女房御返事』に出づという名譽を担った手紙である。

母を語り、孝行を語り、仏陀釈尊の父母に対する孝養と法華経のかかわりを語り、ひいては法華経なくして真の孝養なしと説かれるこの手紙のおおのずから占める重量感、この方面の遺文としてことのほか温かい光を放ってくる。

夢か幻か 死の仏 (上野殿の母尼へ)

※文永十一年七月 (1274年)

「上野尼御前」は——松野六郎左衛門入道の娘である。その女性が、南条氏へ嫁した。南条氏は駿河の有力な信者で、南条からのちに富士郡上野に移り住んだために、上野殿、と日蓮に呼ばれるようになった。尼御前あての手紙は現在、七通が遺されている。しかし、その日付のうちもつとも古いもの(初めての)でも、文永十一年、日蓮五十三歳のときに身延山から書かれたもの。尼御前もふくめて上野一族あて全体の手紙は、四十五通にもものぼる。書簡の中では最大の数字である。文永二年に夫・南条兵衛七郎は病に死す。あとに七郎次郎と七郎五郎の二人の幼い子、幼いも幼い、五郎ちゃんの方はまだお母さんのお腹の中にいるほどの幼さで、お父さんに先立たれたのである。未亡人となって苦勞に苦勞を積む女性が、すなわち夫の死をきっかけで尼となった「上野尼御前」である。未亡人から「上野殿後家尼御前」とも呼ばれるし、二人の子供の母親の立場から「上野母尼御前」とも呼ばれる。

「御供養の物、種々頂戴いたしました。さてその後、上野殿死去の後、冥途より(故殿の)おとずれがおりでしたでしょうか。お話を聞きたいものです。もし、夢にでも見なければ、お姿を見る事もあるはずもないですね。幻でもなければご覧になれないでしょうが、いかがですか。(故殿のほうでは)きつと靈山浄土にて娑婆の事を昼夜に聞いたり見たりしておいでになることです。しかし、(この世の側の)妻子の皆さんからは肉眼なで見ることもお聞きになることもありません。(とはいっても)終には(家族中で)亡き人もともに一所になるものと考えてください。生生世世(生まれかわり、また死にかわりをくりかえす)の間にあなたと夫婦の縁のあった夫は、大海の砂の数よりも多くあることでしょう。しかしながら(あなたにとって)このたびの契りこそ、真の契りの夫であられます。そのわけは、夫の勧めによって、あなたも法華經の信者となられたのですから、(夫君を)仏としてお拝みください。生前中には生の仏、現在に死の仏、生死ともに仏であります。即身成仏という大事の法門こそ、このことです。(中略)

この法門は非常に大切なものですが、(亡くなられた夫君はこれを妻のあなた、すなわち)尼に対してお教えになりました。ちょうどこれは、竜女に対して文殊菩薩が即身成仏の秘法を説かれたことのようなものです。このことをおわかりのちは、いよいよ信心を徹底してください。(中略)

故聖靈(亡くなられた殿の魂)は、この經の行者なれば即身成仏は疑いありません。そんなふうには嘆きなさいませぬ。また、お嘆きになればそれこそ(悟りに至らぬ)凡夫というものです。もつとも、聖人のうえにもそんな例はありません。釈迦仏が御入滅のとき、諸大弟子ら悟ったはずの人々の嘆きのありさま。あれは凡夫のするような振舞いをなさったものですが……。 (その嘆きの心を振り代えて) どうぞ(その分) 追善供養を一生懸命にお励みください。云々……」 (『上野殿後家尼御前御返事』より、文永十一年七月)

それから六年

日蓮聖人五十九歳のとき ふたたび身延から、つぎの手紙が尼御前のもとに届けられた。弘安三年の九月六日付。別名「弔書」と呼ばれる。弔われるのは、あの時お腹の中にいた男の子。いまは十六歳で、そして、今はもう亡き十六歳……。なお、さらにこの前年か前々年あたりに実家の父(松野氏)が亡くなっている。

『南条七郎五郎殿の御死去の御事。人は生まれて死する習いと、智者も愚者も上下一同に知っているという事で、(そういう事態に出くわしても)なげくものではない、驚いてはいけないと、私自身も思い他人にも教えてきたつもりでしたが、いま、こんなことになってしまつて、夢か幻か、いまだによくわからないようなありさまです。まして母御様のあなたは、どれほどか嘆いておられることでしょう。(後略)……』

上野殿後家尼御前御書

日蓮宗生命倫理研究会

第4回『心といのちの講座』 2007.12.4

(資料 No.3) 永田美穂

